『青鞜』における夏葉
—夏葉と戯曲の翻訳—

杉　山　秀　子

夏葉が『青鞜』に発表した戯曲を見てみると、 まず、「イワーノフ」、「叔父ワーニャ」は『戯曲集』（1897年）にもとずいており、「桜の園」は1904年の初版の単行本に依拠していることがはっきりしている。その理由は1904年の初版本には明確な検閲をうけた痕跡があり、（チエホフ全集十八巻1978年モスクワ版472ページ）夏葉の訳したテキスト内にもそれと同様な痕跡を見ることができるのである。なお、ソヴェート版二十巻全集やその後に出された十二巻作品集は1899年—1901年に出された『作品集』の作品をそっくりそのまま載せており、それらのベースになっている。

夏葉が『青鞜』に載せた戯曲の翻訳およびその他の翻訳と著作は次のとうりである。（このうち戯曲はすべてチエホフのものである。）

戯曲『叔父ワーニャ』2巻2、3、4、5、6、7、8、号
連歌『宝玉』2巻8号（明治四十三年）
評論「新しく世にでたチエホフの書簡」2巻9号（明治四十三年）
小説翻訳 「東北風」2巻12号 、 3巻1号、2号 （明治四十三年—四十四年）（プヂーシチェフ作）
戯曲『桜の園』3巻3、4、5号 （明治四十四年）
『イワノフ』3巻 6、7、8、9、10、12号 （明治四十四年）

4巻 1、2、5号 (明治四十五年)
小説翻訳『紫玉』4巻 9、10号 (明治四十五年)
(プシブイシェフスキ作)

夏葉が関わりをもった『青鞜』とはそもそもどのような雑誌であったのか若干説明をしておこう。もともと明治44年、生田長江によって「女だけで女向けの文芸同人誌」が発案され、孤立した女性作家のきゅう合がその動機であった。発行推進の中心的存在はなんといっても平塚明子(号はらいてうで、これは旧仮名づかいによる雷鳥の意味であった。)生田の提案にはじめはためらいもあったが、友人の熱意にも動かされて、1911年発行にふみきったようである。この時青鞜という名前は生田長江からさずかり、それはブルー・ストッキングからの直訳であった。この名はそもそもが18世紀後半イギリスの社交界で、ある女性が伝統を破って青い靴下をはいたことからそのように言われたようであるが定かではない。19世紀にはいると半ばからかい半分に女権論者を呼ぶ名前になったようである。

平塚らいてうは初め必ずしも文学を第一の目的にしていなかっものの、『青鞜』は婦人文芸同人誌としてまがりなりにも1916年2月まで刊行されたのである。この間欠号は二回のみで、毎月一回ずつ発行され続けた。創刊号に載ったらいてうのエッセーの一節は「原始女性は太陽であった。真正の人であった。今女性は月である。他によって生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。」によって始まり、「もはや女性は月ではない。その日女性はやはり元始太陽であった。真正の人である。」で終わっている。このらいてうの一節によって近代日本における高らかな女性解放宣言となったのである。こうして『青鞜』の名は歴史に残った。 しかし、らいてうのこの女権宣言は必ずしも論理性のあるものではなく、「その自己超脱の方法は禅などの影響による観念論のうえにたっていた」(注)1ようである。「女の解放は外的条件をととのえることではなく、現実を切り捨て、想念の世界に飛びたち、自らの闇を一枚、一枚はぎ取り、それ自体発光体となったとき、女は月ではなく太陽だ」(注)2というので

ある。この傾向は現実を冷静に分析することにより、到達したものではなく、むしろ情念的に訴えかけることにより現実を乗り越えることで、一種の呪術的な力をもち得たのである。

翌1912年同人となった尾竹紅吉の“五色の酒事件”（注）3で一躍『青鞜』の名は有名になった。紅吉のこの行為は世間並の女性の基準からはずれているというただその一点だけで世間から集中的な攻撃を浴びた。またらいてうとのレスビアン関係は世間の好奇心を一層かき立てたのである。

女性の自由と解放を標傍した『青鞜』は同人的文学雑誌としてのスタイルを基礎にしていたが、1913年ころから次第に社会評論的な様相を帯びるようになってくる。らいてうは1914年には中央公論に『新しい女』を書き、 新しい女は古い道徳に決して縛られない、古い法律を放棄しようとしていると堂々と宣言したことは社会に大きなセンセーションを巻き起こした。この頃から社会主義者福田英子の評論が掲載されると、この評論の掲載の為『青鞜』は発禁処分まで受ける羽目になる。らいてう自身も婦人問題の根源を社会的な視野から見ていこうとする視点がみられ、エレン・ケイの『恋愛と結婚』等を継続的に翻訳している。またこれと平行して青鞜講演会等を開催し、婦人問題を社会問題として位置づけようと試みているのである。『青鞜』はこれらの活動を通じ何人かの社会改良家を育成したことからも様々な可能性を含んだ雑誌であったといえよう。

夏葉が『青鞜』に賛助会員として参加したのは第二巻第二号の『叔父ワーニャ』の翻訳掲載の頃からである。その頃夏葉とともに活躍した同人にはらいてうをはじめ、田村とし子、野上弥生子、伊藤野枝、与謝野晶子、森しげ、長谷川時雨たちがおり、当時の女性文学者の殆どが名を連ねていた。これらの参加者の所属階層は中、上層階級で、女学校出のインテリ達が多かったのである。この雑誌の財源はらいてうが母から貰った婚資の一部が基礎になっており（最初の資金は100円だった。）後は社員各人の30銭ずつでまかなわれた。発行部数は1000部であったが、最初から華やかなイメージが振りまかれ、

社会的な反響も大きかった。

夏葉は『青鞜』における訳業の中心をチエホフの小説から戯曲に移している。なぜそうなったかのはっきりした理由はわからないが、一つには明治四十二年に小山内薫等によって自由劇場が設立され、翻訳劇等に対する関心が社会的に高まったことにも関係しているといえよう。また「チエホフの短編と脚本」(明治四十三年）の中で夏葉は戯曲もなかなか捨てがたいといっており、戯曲への関心の高さを率直に語っている。また訪露の際には何回もドラマやオペラを見ており、心の中で次第にチエホフ劇を紹介したいという気持ちがわいてきたのかも知れない。また四番目には、夏葉はもともとロシア文学を志したそもそものきっかけが、ドストエフスキーの『罪と罰』や、ツルゲーネフの『片恋』を読んだことからもわかるように心理的葛藤の深さや、その解剖の鋭さに心を奪われる方であった。この夏葉の好みを端的に表している文章として次の引用が多くのことを物語っている。「チエホフの短編にはユーモルがあって、しかもその裏には人生の痛ましい悲哀が隠されているといふ風に一般に認められているようでございますが、実際に一読おなかを抱えて笑い転けるといふ類のものが彼の得意とするお手のものなので・・・・

省略・・・チエホフのものは、たいした努力もなくて楽に読めるのですが、それだけ、チエホフには、ドストエフスキーほど心理の解剖が深くないのじゃないかと思われるので、いま一息といふ感じが、チエホフの作品を読む際には始終おこります。(チエホフの短編と脚本ー『文章世界』第五巻第四号　明治四十三年二月)」とし、チエホフの作品を「あっさりとした水のようなもの」と言い、ドストエフスキーのものを「濃い苦い日本茶のようなもの」としている。従って夏葉風の解釈によれば、「あっさりとしたチエホフの短編」にいささか物足りなさを感じていたとしても嘘にはならないであろう。この様な好みが周囲の環境の変化と共に必然的に戯曲の方に向かわしめたとしてもおかしくはないと言えるのである。

次に夏葉の『青鞜』における戯曲の翻訳はどうであったのかを具体的にみてみたい。例として、まず「桜の園」をとりあげ、他の訳者のものと比較してみることにする。

(1) 夏葉訳：『青鞜』』　第三巻 四月号 17ページー18ページ)

トロフィーモフの台詞：　教育のある社会の、僕の知っている大多数は、大体何もしない、労働には全く耐えない。自分を教育ある社会の一人に任じてはいるが、しかし召使いどもには、やはりおまえといってよびすてにし、農民などに対しては、禽獣の如くにあしらひ、学事にも励まず、真面目には何も読まない、全く何もしていやしない。学問のことはただ口でいふばかりで、芸術上の知識といったら皆無に等しい。皆真面目そうな、厳重そうな顔をして、さも何か重大そうなことばかりを言っている。哲学何ぞも説いてはいるが、大多数は、百中の九十九までは、野蛮人のような生活をしているのです。何か些かとしたことでも、値に拳を固め殴りあふ。可厭な食物を食って、不潔な、汚れた空気のなかに臥てし起いる。処に南京虫や、煙や、湿気や、不義・・・・そうして我々が善良な説をするのは、ただ自分を欺き、人を欺いているのに過ぎん。よく人がいふ所の養育院はどこにあるのですか、あるなら見せていただきたい。どこに通俗図書館がありますか。そのことはただ小説で読むばかりで、実際にはないのです、あるところのものはただ不潔と、ろう劣と、野蛮のみです・・・だから僕は余り真面目な顔つきだの、まじめな話をおそろしくもあるし、大嫌いです、むしろ黙しているにしかずです。

(2) 米川正夫訳：(チエホフ選集　第五巻　小山書店　昭和24年　237ページ)

僕の知っているインテリゲンチャの大部分は、なにものも求めなければ何一つ仕事もせず、労働に対しては今の所無能です。彼らは自らインテリゲンチャと称しながら召使いに向いては「お前」と呼びすてにするし、百姓等はまるで

動物扱いにして、ろくすっぽ勉強はせず、真面目に読書ということもしない。全く何一つしないで科学もただ口先で云々するだけだし、芸術のことだってろくろくわかりゃしないんです。そのくせみんな真面目で、みんな厳粛な顔をして、みんな高尚なことばかり言って、哲学者気取りでいますが、それでいて我々の大多数は百人の内九十九人まで、まるで野蛮人のような生活をして、ちょっとどうかすると、すぐ噛み合ったり、悪口をつきあったりします。そして嫌らしいものを食べて、汚い息の詰まるような所に寝て、いたる所南京虫と、悪臭と、湿気と精神的な不潔がせいかつを支配してる・・・・こういう訳で我々の口にする美しい話は、みんなただ自他のめをごまかす為にすぎないのです。それはもう見え透いています。現にこの頃やかましい労働者の小児あづかり所は、いったいどこにあるんです？国民図書館はどこにあるんです？一つ教えてくださいませんか。そんなものは小説にかいてあるだけで、本当はまるでありゃしない。あるものはただ垢と、凡俗とアジア風の生活ばかりです・・・・僕はあまりくそ真面目な顔が、恐ろしくもあれば、嫌いでもあります。僕はくそ真面目な話を恐れます。それよりいっそ黙っていたほうがいい。

以上夏葉訳と米川訳は1904年の初版本に依拠しているが、次の神西清訳は1904年版とそれ以外のものとを対比させているので両方引用してみる。

神西清訳：(チエホフ全集12　昭和43年　中央公論社　376ページ)

僕の知っている限り、インテリの大多数は、何一つしもせず、さしあたり勤労に適しません。インテリなどと自称しながら、召使いは「貴様」よばわりする、百姓は動物扱いにする、ろくろくべんきょうもせず、なんにもせずに、ただ口先で科学を云々するばかり、芸術だってろくにわかっちゃいない。みんな真面目腐って、さも厳粛な顔つきをして、厳粛なことばかり口にし、哲学を並べているが、＊その一方彼ら一人一人の眼の前では、労働者たちが酷いものを食い、一部屋に三十人四十人と枕もしないで寝ている。(その一方以

下1904年版に依拠すると次のようになる。：その一方、我々の大多数、百中九十九までが、野蛮人みたいな暮らしをして、なにかといえばーすぐぶんなぐる、罵倒する酷いものを食って、息の詰まるような汚いところに寝て)、どこもかしこも南京虫と、鼻をつく悪臭と、酷い湿気と、道徳的腐敗ばかりです。・・・で、我々のやるれいれいしい会話はみんな、ただ自分や他人の眼をくらまさん為であることは、言わずして明らかです。一つ教えていただきたい、あれほどやかましく喋喋されていた託児所は、いったいどこにあるんです？読書の家は、どこにあるんです？それは小説にでてくるだけで、実際は全然ありゃしない。あるのはただ、泥んこと、俗悪と、アジア的野蛮だけだ。・・・・僕は真面目腐った顔つきが身震いするほど嫌いです。真面目腐った会話にも、身震いがでる。いっそ黙っていた方がましですよ。

(上記下線はすべて筆者がふす)

Трофимов. Человечество идет вперед, совершенствуя свои силы. Все, что недосягаемо для него теперь, когда-нибудь станет близким, понятным, только вот надо работать, помогать всеми силами тем, кто ищет истину. У нас, в России, работают пока очень немногие. Громадное большинство той интеллигенции, какую я знаю, ничего не ищет, ничего не далает и к труду пока не способно. Называют себя интеллигенцией, а прислуге говорят《ты》, с мужиками обращаются как с животными, учатся плохо, серьезно ничего не читают, ровно ничего не делают, о науках только говорят, в искусстве понимают мало. Все серьезны, у всех строгие лица, все говорят только о важном, философствуют, а между тем у всех на глазах рабочие едят отвратительно, спят без подушек, по тридцати, по сорока в одной комнате, везде клопы, смрад, сырость, нравственная нечистота. . . И, очевидно, все хорошие разговоры у нас для того только, чтобы отвести глаза себе и другим. Укажите мне, где у нас ясли, о которых говорят так

много и часто, где читальни? О них только в романах пишут, на деле же их нет совсем. Ести только грязь, пошлость, азиатчина. . . Я боюсь и не люблю очень серьезных физиономий, боюсь серьезных разговоров. Лучше помолчим!

T12–13 (стр. 223) (注) 4

夏葉訳も米川訳もテキストは1904年版使用のため下線の部分の「大多数は百人中九十九人・・」の訳は共通している部分がある。もっともこの１９０４年版は大幅な検閲をうけているために両者の翻訳部分は内容的には検閲以前の内容とは百八十度違ってしまってるがそれは訳者の責任ではもちろんないことは明白である。

訳文中の、「我々の大多数は百人中九十九人までがまるで野蛮人のような生活をして、・・・・」の主語《我々》はこの文のコンテキストから言ってインテリととらせているが、実際は原書からもわかるように労働者のことであり、そこにすり替え作業が明らかにおこなわれているのである。この主語のすり替えによって、チエホフの本当に伝達したかった意図は見事にはぐらかされてしまっている。夏葉の訳は他の訳と比較しても原文に忠実で遜色はないと断言できるが、米川訳より40年も以前の訳業であるので、表現も語彙も仮名使いも古めかしいのはいたしかたないであろう。たとえば下線の養育院とか、共通図書館とかわかりにくい用語も使用しているが、紅葉ばりの美文調はすっかり影を潜め、一つ一つの文章が短くなって口語訳に近くなっているのが特徴的といえる。また上記の文の終わりから三行目の箇所ーー有るところのものはただ不潔と、ろう劣と、野蛮のみです。・・・・の箇所の原文では、азиатчина という言葉がついているが、そこを極めて簡潔に「有るところのものは・・・・・野蛮のみです」と結んでいるところから、野蛮という言葉によってアジア的な意味を包含させてしまっていると思いこんでいるのか、或い硯友社的な言葉の調子を重んずるという習慣から字余り的なダブリを避けたためか、または明治三十七年の日露戦争において日本が戦勝国になりその余波をかりて、四十三年の日韓合併

条約にこぎつけるというアジアにおける日本の覇権主義的な上昇志向のムードがアジアイコール野蛮というイメージを忌避させたのかも知れないのである。或いは神の摂理の下にはすべてのものが平等というキリスト教的な原理に基づいてアジアという言葉を使わなかったということも考えられる。いづれにせよ、三者の訳を比較すると、米川訳では、アジア風の生活となっていて少々意訳になりすぎているし、池田訳ではアジア的野蛮となっており、説明的ではあるが、特定地域の蔑視を予想させ得る。現代においてはазиатчина という言葉には文化的に遅れているという意味はあってもアジア的な意味あいはなくすでに廃語になっている（1965 年の時点）ことからもわかるように夏葉の訳が如何に的確で先進性があったかがわかる。

次に別の箇所の三者による翻訳をもう少し比較検討してみることにする。

(1) 夏葉訳：(『青鞜』「桜の園」24 ページから 25 ページ)

・・・アーニャ様、あなたの祖父や、曾祖父、またすべての先祖方は生きた人間を所有物にしていた地主たちでした、さうして庭の桜の木の一本毎から、一枚の葉毎から、一つの幹の間から、皆人が、つまり人の存在があなたをにらんでいるじゃ有りませんか、あなたにはその声声が聞こえませんか・・・・・いやしかし、これは恐ろしいです、あなたの庭はものすごいです、さうして晩や、夜更けから、庭のなかをとうると、木木の古い皮がぼんやりと光っていて、ちょうど桜の木木が、百年、二百年前に有ったことを夢に見ているかのようです、おそろしいなにか幻影が桜の木を悩ましているかのやうです。なんとひはう！

(2) 米川訳：　(チエホフ選集　「桜の園」242 ページから 243 ページ)

・・・あなたのおじいさんも、曾祖父さんも、あなたの先祖はみんな地主

で、生きた魂を自分のものにしていたのです。本当にこの国の桜の木一本一本から、桜の葉一枚一枚から、生きた人間があなた方を睨みつけていないでしょうか？一体あなたにはその声が聞こえませんか・・・おお、恐ろしい、あなたの家の庭は恐ろしい。よく夕方か夜中に庭を歩いていると、桜の木の古い皮が鈍く光って、何だかその木が二百年もあったことを夢にみながら、重苦しい幻に苦しめられているやうな気がします。いや、何もいふがものはありません！

(3) 神西清訳：(チエホフ全集 「桜の園」380ページから381ページ)

・・・アーニャ、あなたのおじいさんも、曾おじいさんも、もっと前の先祖も、みんな農奴制度の賛美者で、生きた魂を奴隷にして、絞り上げていたんです。で、どうです、この庭の桜の一つ一つから、その葉の一枚一枚から、その幹の一本一本から、人間の眼があなたをみていはしませんか、その声があなたに聞こえはしませんか？・・・*生きた魂を、わがもの顔にこき使っているうちにーそれがあなたがたをみな、昔生きていた人も、現在生きている人も、すっかり堕落させてしまって、あなたのお母さんも、あなたも、おじさんも、自分の腹を痛めずに、他人の懐で、暮らしていることにはもう気がつかない、——あなた方が控え室より先へはとうさない連中の、懐でね。(*以下は検閲以前の文章である。1904年版に従えば (1) と (2) のその声が聞こえませんか・・・・以下の表現になる。)

Подумайте, Аня: ваш дед, прадед и все ваши предки были крепостники, владевшие живыми душами, и неужели с каждой вишни в саду, с каждого листка, с каждого ствола не глядят на вас человеческие существа, неужели вы не слышите голосов. . . Владеть живыми душами — ведь это переродило всех вас, живших раньше и теперь живущих, так что ваша мать, вы, дядя уже не замечаете, что

вы живете в долг, на чужой счет, на счет тех людей, которых вы не пускаете дальше передней. . . Мы отстали по крайней мере лет на двести, у нас нет еще ровно ничего, нет определенного отношения к прошлому, мы только философствуем, жалуемся на тоску.

T12–13 (стр. 227–228) (注) 5

(1) (2) (3) の下線の部分を原文と比較させると、(3) は原文にない言葉を補ってやや説明的な訳文にしているが、(1) と (2) はほぼ原文に忠実に訳しているといえよう。但し、(2) の米川訳は下線部以外の文が検閲を経ていることからかなり内容がぼかされており、そのうえ、живые души を生きた魂と抽象的に訳しているので文意を把握するという点で、余計読むものにはわかりにくい訳文になってしまっている。これに対して夏葉訳は живые души を生きた人間とはっきり訳し 、また владевшие を米川訳は自分のものにしていたという表現でやや柔らかいものにしているが、夏葉訳では・・・を所有物にしていた地主と訳し、実に原文に忠実な明快な訳になっている。故に後に検閲文が続き、作者が言いたかった全体の文意はねじ曲げられてしまうのにもかかわらず、夏葉の下線部分の訳が妙に生きているといわざるを得ない。このようなところに夏葉の性格の律儀さとロシア語力の確かさというものを感じさせられるが、これはあくまで語学上の律儀さであって夏葉のイデオロギー上の見識の高さを示すものではないことは言うまでもない。ともあれ結果的には夏葉はチエホフが思想をできるだけ排除しながらも、現実への透視をおこたらなかった姿勢の一端をを余すことなく伝えているのである。しかしごく希ではあるが、夏葉にも次のような語学上のミスが有ったようである。

ロパーヒンの台詞：わたしはこうだ、朝は五時におきて早くから日の暮れまで働きどうしです、・・・(『青鞜』三巻第二号 18 ページ)

Лопахин. Знаете, я встаю в пятом часу утра, работаю с утра до вечера, ну, у меня постоянно деньги свои и чужие, и я вижу, какие

кругом люди.

T12–13 (стр. 223) (注) 6

この朝は五時にの所の原文はя встаю в пятом часу утра でこれは в пять часов утра とは明らかにことなるわけで四時過ぎと訳した方が無難であるがなぜか誤訳している。

夏葉の原文に忠実に訳すという姿勢は『桜の園』にのみあらわれたものではなかった。『青鞜』の中の他の戯曲にも一貫してみられる。そこには初期短編にみられるように単に調子を整えるための語呂合わせや、書き足し、ないしは大幅な省略、削除はも早見られない。小説と違って会話と会話、ロジックの積み重ねによってできた戯曲という性格上の違いもあるのかも知れない。硯友社的な美文調の長々しい雅文体が以前に比べて殆どみられず、です、ます調を使うことによって、できるだけ口語に近づけようとする夏葉の意識的な努力が文体のうえにも表れたともいえよう。具体的に『叔父ワーニャ』や、『イワーノフ』を参照してみよう。

夏葉訳：アーストロフの台詞 (『青鞜』第二巻 三号 『叔父ワーニャ』 17ページ、18ページ)

君は暖炉を焚くには、泥炭でもできるじゃないか。小屋を建てるなら石でもよかろう。而して僕が仮にここで一歩を譲って、必用の為なら林を伐るのも敢えてこばまんとしてだ、しかし何のためにそれを乱伐するのか、露西亜の深林は斧の響きのもとに伐りさかれている。みだりに巨万の樹木は伐り倒されている。獣類や鳥類の居所は荒らされて、川は浅くなって水は涸れる、美しい景色は去ってまたかえらんのだ。これは皆人間が怠者で、身を屈めて地中から燃料を取り上げるといふだけの精神がないからだ。(エレナ・アンドレエヴナに向かって) 奥様本当じゃありませんか、われわれみずから造ること

のできない、そのものを破壊して、この自然の美を暖炉の中で焼いてしまうなんぞは、よほど無知な野蛮人とならなければならないわけでしょう。人間は自分に与えられたところのものを、益殖やして行くために、知恵と、創作力とを固有しています。しかし今日に至るまで、何にも創作力を用いないのみならず、強いて破壊を敢えてしているのです。

神西訳：アーストロフの台詞　(「ワーニャおじさん」 チエホフ全集12　181ページ 、182ページ)

ストーヴなら泥炭を焚けばいいし、小屋なら石でつくればいいじゃないか。もっとも、必要とあらば、木を切り出すのに反対はしないが、わざわざ森を根だやしにする必要が、どこにある？今やロシアの森は、斧の下でめりめり音をたてているよ。何十億本という木が滅びつつあるし、鳥や獣の住処は荒らされるし、川は次第に浅くなって涸れて行くし、素晴らしい景色も、消えてまたかえらずさ。というのも、人間という奴が元来不精もので、腰を曲げて地面から焚きものを拾うだけの才覚がないからさ。(エレーナに) そうじゃないでしょうか、ねえ、奥さん。あれほど美しいものをストーヴで燃やしちまったり、我々の手では作り出せないものを滅ぼしてしまうような乱暴は、よっぽど無分別な野蛮人ででもない限り、できるはずは有りませんよ。人間はものを考える理性と、ものを創り出す力とを、天から授かっています。それでもって、自分に与えられているものを、ますます殖やしていけという神様の思し召しなのです。ところが、今日まで人間は、創り出すどころか、ぶちこわしてばかりいました。

Астров. Ты можешь топить печи торфом, а сараи строить из камня. Ну, я допускаю, руби леса из нуждуы, но зачем истреблять их? Русские леса трещат под топором, гибнут миллиарды деревьев, опустошаются жилища зверей и птиц, мелеют и сохнут реки, исчезают безвозвратно

чудные пейзажи, и всё оттого, что у ленивого человека не хватает смысла нагнуться и поднять с земли топливо. *(Елене Андреевне.)* Не правда ли, сударыня? Надо быть безрассудным варваром, чтобы жечь в своей печке эту красоту, разрушать то, чего мы не можем создать. Человек одарен разумом и творческою силой, чтобы преумножать то, что ему дано, но до сих пор он не творил, а разрушал. Лесов все меньше и меньше, реки сохнут, дичь перевелась, климат испорчен, и с каждым днем земля становится все беднее и безобразнее.

T13 (стр. 72–73) (注) 7

下線部分の夏葉訳は巧みに言葉を補って訳した神西訳に比べると必ずしもこなれた上手な訳とはいえないが、少なくとも原文にそって原文の主旨を生かそうという姿勢がここでも表れている。また何よりもチエホフが提起した極めて今日的なテーマを八十年前の日本語でも通用させているところに夏葉の訳文にたいする並々ならぬ努力と成果を認めざるをえない。

次には異なる文化背景をもった民間信仰や慣習に根ざした言葉を翻訳する場合にはそれなりの配慮が必要である点である。夏葉訳では原語をそのままカタカナにしてその意味を括弧の中で説明しているが池田訳ではそのまま意訳している例を次に見てその効果を比較してみよう。

夏葉訳：ワーニャの台詞一（『青鞜』第二巻　第六号　3ページ）

何も躊躇することは有りやしません（元気よく）。え、もし、我輩の愛する大事な人！もっと利口になりなさい！あなたの血管にはルサルカ（水に住む女の霊）の血が流れています、ルサルカにおなりなさい！而して一生にただ一度でも自由を得てみなさい。水神の誰にか首丈惚て、一所におもふさま、水の深みへザンブリと計りに飛び込みなさるがいい！而して教授や、我々が

あっけにとられて、あいた口が閉がらんやうにしてお見せなさい。

神西清訳：(「ワーニャおじさん」チエホフ全集12　207ページ)

何をくよくよなさるんです？（声を励まして）ねえ、僕の大事なエレーナさん、せっかくそれだけの器量をしてさ、もっと利口になるものですよ！あなたには魔性の血が流れている、いっそのこと魔女になっておしまいなさい！せめて一生に一度は、おもいっきりやってごらんなさい。さあ早く、魔物みたいな男の誰かに、首ったけ惚れてご覧なさい。教授閣下をはじめ、我々一同が、(両手をひろげて）こうあっけにとられるぐらい、ずぶりと深みへはまってごらんなさい！

Воиницкий. Что томитесь? *(Живо.)* Ну, дорогая моя, роскошь, будьте умницей! В ваших жилах течет русалочья кровь, будьте же русалкой! Дайте себе волю хоть раз в жизни, влюбитесь поскорее в какого-нибудь водяного по самые уши —и бултых головой в омут, чтобы герр профессор и все мы только руками развели!

T13 (стр. 91)（注）8

原文からもわかるようにрусалка とは主にウクライナや南スラヴ地方で民間伝説上言い伝えられてきた神話の世界の水の精の意味で、通常長い髪を垂らして人魚の姿をして水中に住むといわれている。古代ルーシーのルサルカは木に宿り死者の化身とみられていた。それは故あることで春になると、ルサルカは水中からはいだして木木に宿り、夏の終わりに水中に戻るとスラブ人には信じられていた。ロシアのルサルカは西スラブのものとは様相が若干異なるようである。西スラブでは陽気でいたずら好きなルサルカは針葉樹の多いロシアでは陰気で邪悪な性格に変わってしまったのである。「魅力的な声で楽しい歌を歌っていたルサルカは森のなか川では髪はもじゃもじゃで、顔色悪く、緑色の目をして、いつも裸だ。人を川に引きずり込んで、死ぬまでくすぐって沈めようと

待ちかまえている。」(注) 9 陽気で魅力的なルサルカはどうやら南スラブの伝説であり、ロシアでは、たとえば「沿ボルガ地方では藁人形の形になり、また他の地方では制御された馬の頭を棒で固定した形になるなど、優雅な美人ルサルカの詩的神話は、ロシアでは色あせて輝きを失ってしまっているのである。」(注) 10

池田訳ではこのルサルカを魔女とか、ルサルカの血を魔性の血とか、воляного の表現を魔物とか意訳しているが、これらの意訳では日本人の感覚には正しいイメージをわかせないのではないかという疑念がもたれるのである。これからもわかるように異質な文化のもとでの言葉を意訳だけで片づけてしまうと必ず落とし穴があるということである。ついでながら原文にはроскошь という単語があるが、夏葉訳では「我輩が愛する大事な人・・・」という訳語の中に含ませているが、池田訳では「せっかくそれだけの器量をしてさ・・・・」と原文を大幅に逸脱した意訳になっている。

夏葉が訳した『青鞜』における三つの戯曲の掲載順序はまず『叔父ワーニャ』、『桜の園』、『イワノフ』になっているが、チエホフの実際の執筆順序は『イワーノフ』(1887 年)、『叔父ワーニャ』(1889 年)、『桜の園』(1903 年) なっている。夏葉の翻訳としてはやはり最後の『イワノフ』が一番口語訳に近く、平易な表現になってきたということは三作めで戯曲の翻訳に慣れてきた習熟度のちがいからきているのかもしれない。しかし『イワノフ』においても一部の例外をのぞいて翻訳の厳密さという点では些かも揺るがせにはされておらず、むしろその点がかえって読むものに煩わしさを感じさせるほどである。

次に夏葉の『イワノフ』と池田健太郎訳の『イワーノフ』とを比較引用し、夏葉が省略ないし意訳をさけた部分に下線をひいておく。

夏葉訳：(『青鞜』第四巻　第五号　47 ページ)

イワノフの台詞：若し<u>人間が馬鹿でもなく</u>、教育があって、そのうえに壮

健なものであるのに、何の原因もなく、泣き言を言い出して、丁度平らかな坂を下の方に、だんだんと滑りだしたとすれば、もうその人間はそれで止まることはできないのです。又彼を救うこともできないんだ！さうさ、奈何して僕が救はれるものですか？何でもって？酒をのむことは僕にやできない、飲めば、頭が痛むのだし、拙劣い詩をかかうか、それもできない、或いは自分の心からの怠惰の為に祈祷して、さうしてこの怠惰において、何か非常に高尚な、立派なことを認めることも僕はできない、・・・・・

池田訳：(チエホフ全集12　84ページ)

イワーノフの台詞：教養のある健康な人が特別の理由のないのに泣き言を並べて斜面をころがりはじめたら、その人は底なしに転落して、救えないものだ！ああ、僕の救いはどこにある？何にあるのだ？僕は酒が飲めない、—頭が痛くなるんだ。下手な詩を書こうにも、書き方を知らない。精神の怠惰を求めて、なまけ癖に何か至高の意義を見つけることもできない。

Иванов. Если неглупый, образованный и здоровый человек без всякой видимой причины стал петь Лазаря и покатил вниз по наклонной плоскости, то он катит уеж без удержа, и нет ему спасения! Ну, где мое спасение? В чем? Пить я не могу — голова болит от вина; плохих стихов писать — не умею, молиться на свою душевную лень и видеть в ней нечто превыспренное — не могу.

T12 (стр. 71–72)（注）11

上述の文とは反対に夏葉の次の翻訳文にはごく希に若干の省略と意訳を含んでいるのでみてみる。

夏葉訳：(『青鞜』第四巻　第五号　48 ページ)

イワノフの台詞：お前の言には愛ではなく、正直な心の剛情が現れているばかりだよ。お前の目的は僕を真人間にしたい、さうして救ひたひ立派に功をしてみたいといふそのことなのだ。それがお前に嬉しかったのだ・・・・・・で、今となっちゃお前はその思想を後に引きたいとおもっているのだがただお前のある間違った思想がお前に邪魔をしているのだ、わからなけりゃいけないよ！

池田訳：(チエホフ全集　12　85 ページ)

イワーノフの台詞：今君の内部で喋っているのは、愛じゃなくて、正直な性質からでた強情さだ。君は何とかして僕の内部に人間をよみがえらせよう、僕を救おうという目的に献身してきた。自分が手柄を立てているという考えが君の誇りをくすぐった。・・・・・いま君は手を引こうかと思いながら、偽りの気持ちに邪魔されている。よく考えてごらん！

Иванов. А когда ты станешь моею женой, задачи будут еще сложней. Откажись же! Пойми: в тебе говорит не любовь, а упрямство честной натуры. Ты задалась целью во что бы то ни стало воскресить во мне человека, спасти, тебе льстило, что ты совершаешь подвит. . . Теперь ты готова отступить назад, но тебе мешает ложное чувство. Пойми!

T12 (стр. 72)（注）12

ここでは夏葉は珍しく во что бы то ни стало（どんなことがあっても）という熟語をとばしてつぎに進めている。最後の文の чувств を夏葉は思想と意訳しているのは極めて異例なことといえよう。なるほどこの単語の意味を

интуитивное понимание, восприятие ないしはзнание чего-нибудь か、あるいは観念の意味としてとらえるならば思想と意訳した意味もわからなくもない。なぜならチエホフ自身は思想を観念や理念のシノニムとしてとらえており、常々思想を敵対的なものとして把握し、このイワーノフの台詞のなかでもそれを否定し、それを退けようとしているからである。これはつぎの1888年12月30日付きのスボーリンあての手紙からも明白にチエホフの意図を読みとることができる。チエホフはその手紙のなかでイワーノフの恋人であるサーシャをどんな女性として思い描いているかを伝え、そして皮肉を込めて彼女の《自己献身的》哲学を語っている。「サーシャはより新しい形象の娘です。彼女は教養があり、賢く、誠実でもあります。この女性は男が意気消沈しているときに男を愛するのです。イワーノフが意気消沈するやいなや、娘は丁度そこにいて、その時だけを待っているのです。それどころか彼女は極めてやりがいのある、神聖なる任務をもっているのです。彼女は倒れたものに十字を切り、足元に彼をおき、彼に至福を与えるのです。・・・彼女が愛しているのはイワーノフではなくて、この任務なのです。」(注) 13　イワーノフは彼女の《自己献身的な哲学》をすでに見破っており、この限りにおいて夏葉の用いた思想という訳語は作者の意図とはそうかけ離れた訳語ではないことは認識され得る。しかし夏葉が上記のような意味において、作者の意を汲んで意識的に思想という言葉を使ったかどうかは残念ながら定かではない。　(続)

注

1) 『青鞜』解説　・総目次・索引　p. 9–10
2) 同上
3) 青鞜の社員の一部が紅吉を中心に好奇心から当時男の世界であった吉原に登楼し、酒をのんだという他愛のない事件をさしている。
4) チエホフ全集　13巻　стр. 223　モスクワ　1978年
ナウカ出版

академия наук СССР
институт мировой литературы
имени а.м. горького
полное собрание москва–1978
сочинений и писем
в тридцати томах
издательство «наука»

5) 同上 13巻 стр. 227–228
6) 同上 стр. 227
7) 同上 стр. 72–73
8) 同上 стр. 91
9) ユーラシア研究 4号 p. 54–55
10) 同上
11) チエホフ全集 12巻 стр. 71–72（露文既出）
12) 同上 стр. 72
13) 同上 стр. 326